
ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード16:不信と嫉妬 (Hung Up)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コーコーク・ラブストーリー／Hピソード16・不信と嫉妬（

Hung Up）

【Zコード】

N3545G

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

デイーンが女性とデイナーを共にしたことに端を発し、激怒するポール。大喧嘩に発展したが、翌日は元通りになる。しかしそれ以後、ポールの周囲に変化が現れた。幾人かの女性の影がチラつきはじめたのだ。「ぼくはゲイだから女性とはおかしなことになりようがない」と言つ彼に、デイーンはヤキモキ。この複雑な感情はもしかして……？

(前書き)

いかがは 一話完結のシリーズ物 につき、ヒッソード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

「よくわかったよ」とポールは言った。そこには理解と許しがあるとおれは思つていた。なんといつても彼はわからず屋じゃないし、基本的には懐の広い男だ。

「よくわかったよ」。その言葉の意味をおれはもつとよく考えるべきだった。彼が何をどう“わかった”のか、そのところを突っ込んで聞くべきだった。

「よくわかったよ」。一見なんの問題もなく聞こえるその言葉の中に、恐るべきメッセージが含まれていると、いつたい誰が予想し得ただろう？

「よくわかったよ」。それは彼からの最終通達。ポール・コーパーの静かなリベンジの幕開けだったのだ。（ホラーか？　これは？）。

ある週末の夜のことだ。おれとポールは韓国料理店でとびきり辛いディナーを満喫。運動がてら歩いて帰ろうと決めた十五分後に雨が降り出す。マンハッタンの激しいタクシー争奪戦に敗北し、びっしょり濡れて帰宅した後に、その事件は起きた。

「ほんとにひどい降りだったな……あと五分で家に着くってところでこれだ。くそつ！」

おれは悪態をつきながら、ジャケットを脱いだ。ヘンプ（麻）は水を吸いやすい素材だ。こいつを絞つたら、きつとこわいくらい雨水が採れることだろう。

床をまんべんなく濡らす前に、まずはバスルームに直行……しうとしたところ、電話の留守録ボタンが、赤くチカチカと点滅しているのが目に入った。でも今はそれどころじゃない。

「あれ、電話だ」ポールがそう言ひて、再生のボタンを押したのも目に入った。でもおれはとつとと靴を脱ぎたかつたし、とにかく床を汚したくなかった。再生される留守番電話のことはどうでもよかつた。それが実際に再生されるまでは。

『“カチャツ”……ハイ、ティーン。 昨夜は楽しかったわ。 次回はカンガルーにしましちゃうね……じゃあまた……“カチャツ、ピー”』

時は止まり、すべての動きが凍結された。留守録ボタンは点滅。おれの心のランプも点滅。流れた音声はどう聞いても女性のもの。推定される年齢は二十代から四十代までのいずれかだ。

「誰これ」電話機を見据えながらポールがつぶやいた。

仕事を終え、食事も終え、雨に降られて帰宅した後、やることといえば風呂に入つて寝るだけだと思うだろう? ところがどっこい本番はこれから。今夜のメインイベントは、深夜11時からのスタートだ。

「仕事の付き合いで遅くなるって言つたじゃないか!」

「仕事だ! 彼女は会社で使つててる広告代理店のデザイナーなんだ!」

「女だなんて聞いてない!」

「いちいち性別を申告する必要があるのか?」

一週間の疲れがたまつた週末。体力的にはぐたびれ果てているはずだが、おれたちは元気いっぱいに怒鳴りあつてゐる。普段食べつけない香辛料の採り過ぎには、エネルギーを増大させるパワーが隠されているのかもしねりない。それは“怒り”という、キムチによく似た、パンチのある感情だ。

ポールは冷ややかな目でおれを見、「美人だつた?」と腕組みをした。「聞かせてよ。彼女はどんな人? ブス? 平均? 美人?」「そんなことどうでも……」

「言つて」

「………… 美人だ」

「そらみる！」

「何が“そらみる”だよ！？ 美人だつたらどうだつて言つんだ！？」

「一緒に食事をしただけだ！ ベッドを共にしたわけじゃない！」

「そうだね、未然に防げてよかつたと思つてるよ」「ポールが頭を振ると、水滴が左右に飛んだ。彼は自分がびしょ濡れだつてことも忘れてしまつたようだ。

「彼女、きみのこと一人暮らしだと思つてるんだね？ よりによつて自宅にメッセージを残すなんて……ぼくのことは相手に何も？」

「仕事の相手だ。そういうことは話してない」

「仕事の相手に自宅の電話番号を教えるわけ？」

「きつと名刺を見たんだろ」「

「会社の名刺に自宅の番号を載せるわけがない」

「相手によつてはプライベートな名刺を渡してゐる。週末や緊急のときには、ファックスを送つてもらうことが発生する場合があるからな。特に広告は紙媒体だから、メールじゃ済まないこともあるんだ」

「苦しい言い訳

「おれの言つことが信じられないのか？」

「信じたいけど、彼女の聲音の方がずっとリアルで……。ねえ、ここでバ lena キや、次回は“カンガルー”？ なにそれ？ 新しいセクスの体位かなんか？」

「アフリカ料理の話をしただけだ。カンガルーのステーキの話をした。彼女はまだ食べたことがないって」「アフリカン・レストラン。なるほど、それが次のデートの場所なんだ？」

「つたく……こうなるからきみには言いたくなかったんだ」

「言いたくなかった？ そうか、これは予測の範疇だつたつてわけだ。他には何を隠してるの？」

「何も隠してやしない！ いつまで言いがかりをつけられるんなら、隠したくもなるけどな」

「ぼくが言いがかりをつけてるって？ ビうやつていきなり被害者

になつたわけ？ 浮氣したのはきみの方だつてのに…」

「浮氣なんかしてないつて言つてるだろ！ 嫉妬深いのもいいかげんにしろよ…」

「きみがそうさせらるんだ！」

「なんでもおれのせいか？！ 嫉妬深いのは『ティーンのせい！？』自分に落ち度はこれっぽっちもないんだな！？」

「ぼくに落ち度があるから他の女に目移りしてゐる？ だから浮氣を？」

「浮氣してない！ そんなに言つなら彼女に電話してみる！ おれが浮氣したかどうか、直接聞いて確かめてみればいい！」 おれは受話器を取つて、彼に突きつけた。

「……ぼくにそんなことをさせようつての？」

「納得しないんだから仕方ないだら」

「もういい」

「なに？」

「きみは自分の時間を好きに使う権利があるし、誰と会つのも自由だ。仕事のことも含め、誰とふたりっきりで会つのも好きにできる。そういうことだね？」

「…………あ……まあ……そうだ」

「よくわかつたよ」

彼は急に怒りを取り下げ、バスルームへ消えた。バタン！ と強くドアを閉めたところを見ると、怒つてはいるらしい。今のところは休戦ということか。

点滅する留守番電話のボタン。 消去 を押すと、「消去してよろしいですか？」と女性の声で確認される。

「よろしくに決まつてんだろ！ 消せ！」

怒鳴り、再度ボタンをプッシュ。電話は“ピーシ”といつ心電図のフラット音にも似た音を発し、ようやくメッセージを消去した。

まったく、心肺が停止したのはこっちの方だぜ。もう早いところヤワーを浴びて眠つてしまいたい。せっかくの週末、ひどいスター

トもあつたもんだ。ところでポールはこの後、一時間もバスルームを占拠した。これが彼の“かわいい”復讐だというのは、言つまでもない。

休日の朝、まあおれがやることと言えば、それは“たっぷり眠ること”。朝七時に眠りから醒め、今田が土曜だということを思い出してもまた眠る。時計が午後を指す前に起き出し、熱いシャワーでようやく目を覚ます。キッチンでグレープフルーツを絞つてると、ポールがやってきた。彼は「おはよう」と挨拶をし、おれに優しく微笑みかける。どうやら機嫌はよさそうだ。

「出かけるのか？」とおれは聞いた。ポールはきちんと身支度をしていて、帽子までかぶっていたからだ。

「うん、夜までには戻るよ」

「どこへ？」

「ちょっとドテートに」

グレープフルーツ・ジュースに口をつけたおれは、固睡と共にそれを飲み込んだ。＊＼ぐん＊＊

「なんてね、冗談だよ」ポールは晴れやかな顔で笑った。「お店のお客さん、女の子たちと出かけるんだ。ランチをとつて、それからショッピング。“ガールズ・ディ”だね」

「男はきみだけ？」

「そう、うらやましい？」

「ああ、ちょっとな……なんて、冗談だ」言ひて、おれはポールの反応を見た。彼は笑顔を崩そつとはせず、昨日のことは気にもしないみたいだ。

「でも珍しいな？ 店の客と出かけるなんて。ダイレクトメールですら書くのを嫌がつていたのに」

「前から誘われてたしね。たまにはこいつののもいいかと思つて」

「顧客を大事にするのはいいことだよ。とにかくその帽子は新しいやつ？」初めて見た

「うん、こないだ買ったばかり」

「いいデザインだ。よく似合うよ」

「そう？ ありがと。じゃ、行ってくる」素早くおれの頬にキスし、白いソフト帽のハンサムは出て行った。

あの帽子、彼にしては珍しいチョイスだ。そもそも“ポールが帽子”って自体が珍しい。冬場にはニット帽をかぶることもある彼だが、それだって防寒の目的が主だし。なるほど、白いソフト帽は“ガールズ・ディ仕様”ってことか。確かに女の子が好きそうなデザインではあるが……。それにしても、出かける相手が女の子でよかった。“デート”と言われたときは一瞬、動きがとまつたからな。昨日の仕返しでもされるのかと。彼はああ見えて、一度怒ると止まらなくなるところがある。怒りに火がつくのはあつという間で、昨晩のようなことは、これまでにも何度もあった。一方、おれは感情を溜め込む方。ああやつて一気に吐き出すことはまずないので、ホールのやり方にはずいぶん面食らつところもある。まあ、でもこんなのは些細なことだ。小さな喧嘩と和解。世の恋人同士、誰にでもある小さなやり取り。

窓から外を見ると、マンハッタンは素晴らしい晴天だった。恋人が不在の休日の午後。今日一日をどうやって過ごすのか？

おれは受話器を取つて、短縮番号をプッシュした。

「あら、ハイ。ディーン、めずらしいわね。元気？」

“そつちは元気？”と聞き返すまでもなく、とっても元気そうな声はおれのママ。ニューヨークからマイアミに移り住んでからというもの、彼女は昔よりも若返った気がするほどだ。

「あのや、ひょっと教えてほしい。アップルパイの作り方なんだけど」

「ママは冷凍のパイシートを使ってるのよ」

「それは知ってる。だからそのやり方をわ

「りんご」を甘く煮るのよ。あとはパイシートの箱に書いてあるわ」「ついぶん適当だな」

「そつちはずいぶん料理にマメになつたこと。なんだか娘ができたみたいで嬉しいわね」

「娘はいるだろ。アイリーンが」

「あの子はお菓子作りなんか全然興味ないのよ。ブラウニーの焼き方も知らないで、いつも買つてきたものばかりを子供たちに食べさせてるんだから。ところでポールはお元気?」

「ああ、元気だよ。今日は出かけてるけどね。女の子たちとデートだ」

「デート? だつてあんたの彼氏でしょう、ポールは」

「うん、だから単なるデート。店の顧客と買い物に行つたんだ」

「それって心配じやないわけ?」

「別に。ポールは女には興味ないよ」

「そりゃそうだらうけど……相手はどうだかわからないじゃない?」

「そんなの!」おれは思わず笑つた。「もし女性に惚れられたとしても、ポールは迷惑するだけだらうね。これが同性と一人きりでとなれば別だけど。心配するようなことは何もないよ」

「そうなの。ならいいけど」

ママは氣を回しすぎだ。もつとも母が若かつた時代には、恋人でもない異性と出かけること自体、珍しいことだつたのかもしがれない。詳細なメモを頼りに、おれはアップルパイの材料を買いに出る。ところでのこのレシピ、本当に砂糖が8オンスも必要なんだろうか? (8オンス=約250g)

アップルパイは焼きたてが一番うまいとおれは思つてゐるので、窓辺に置いて冷ますような真似はしない。砂糖はレシピよりも減らし、シナモンは多めに入れた。これで食べるときにバニラ・アイス

クリームを添えれば完璧。

ポールの帰宅は思いのほか遅かつたが、アップルパイの焼き上がり時間にはぴったりだ。

「死ぬほど歩き回ったよ」といつぱは、両手にたくさんのショッピング・バッグを持っている。

「ブルーミング・デールを買い占めたのか?」

「うん、メンズ売り場はね」

「荷物、部屋に置いてこいよ。どびきりのアップルパイをこちそうするから」

「アップルパイ?」

「おれが焼いた」

「へえっ! すごい!」床に紙袋を置き、キッチンに駆け込むポール。オープンからパイを取り出すと、彼は目を細めて香りを吸い込んだ。

「ねえ、さつき電話をくれたのって、もしかしてこれ?」

おれはポールの出先に電話をかけた。帰宅時間を知りたかったらだ。

「ああ、パイをオープンに入れるタイミングを見計らってた」

「そつか。なんだ」

「なんだ、つて?」

「“何時頃帰つてくる?”なんて、珍しいこと聞くなって思つたら。てつきりぼくのデートを心配したのかと」ポールはひょいと肩をすくめた。

「心配するようなことがあつたのか? おつかない女性たちに襲われそうになつたとか?」言いながら、ポールの腰に両手を回す。彼はくすぐつたそうに笑い、「そんなの何もないよ」と答えた。「ぼくはゲイだし、女性と出かけたところでどうにかなるわけない。きみとは違うんだしね?」

「ああ、まだ言つか、こいつ!」おれはポールの脇腹を思いつきりくすぐつた。ここは彼のウイーク・ポイント。案の定、功を奏し、

ポールは奇声をあげて飛び跳ねた。

「減らず口を叩くとアップルパイを分けてやらないぞー。」

「わかった！ わかったから！ 手を離して！」

笑いながら降参する彼をしつかり抱きしめ、そのままの姿勢で耳にキスをする。ここも彼のウイーク・ポイント。案の定、功を奏し、ポールは身じろぎひとつしなくなつた。

焼きたてのアップルパイと香り高い紅茶。昨日の喧嘩は遙か彼方へ。これがおれの“甘い”復讐だというのは、言うまでもない。

「ポール、おれの……あ、ごめん」

今おれが言った言葉の状況を説明すると、『今週のニューズ・ウイークを探していて、それが見当たらぬので彼の部屋を訪ねたところ、ポールは電話中だったので、失礼を詫びた』ということになる。事態を把握していないと、さっぱり意味を成さない言葉もあるものだ。

『今、電話中だから後でね』と、無言のジェスチャーをするポール。おれもつられて『わかった、邪魔してごめん』と、身振り手振り。こつちは言葉を発しても別にいいのだが。

何気なくテレビを点けると、観ようと思つていてずつと見逃していた映画が、ちょうど始まったところだった。急いで冷蔵庫からビールを取り出し、フレッシュホールの袋を開ける。ソファに滑り込んだところでタイトルロールが終わり、物語がスタート。我ながら素晴らしいタイミング。この間のアップルパイの焼き上がり時間と言い、ここ最近のおれはなかなか間がいいと思う。（例の留守録が再生されたタイミングについてはノーノメント）

映画を見終わり、何気なく電話機に手をやると、通話中のランプが点灯していた。ポールが子機を使っているのは知つてゐるが、映画を見る前からだから、少なくとも一時間は経つてゐる計算になる。

彼はあれよりも長電話だが、一時間超とこいつのは珍しい。

『ピールの空き缶を片付けていると、ポールが部屋から出でてきた。

「さつきは『ごめんね。何だつたの？』

「たいしたことじやないよ。もしかしてあれからずっと電話を？』

「そうだよ。あ、電話使いたかった？』

「いや、そうじやないけど……ずいぶん長電話だつたな。誰としゃべつてたんだ？』

「キャンディが引っ越しすつていうから、その相談に乗つてたんだ。どこの引っ越し会社がいいか悩んでるみたい」

「キャンディって？』

「ぼくの顧客。先日一緒にショッピングに行つたうちのひとりだよ。彼女、引っ越し先のリビングに絵を飾りたいつて言つんだ。きみの会社の展示会に連れていくつても？』

「ああ、それは願つてもないな。ちょうど今週末にソーホーで即売会がある。おれも顔を出すから、そのときに来てくればサービスできると思うよ」

「ありがと。きっとよろしくぶよ」

「それでさ、きみの部屋におれの……』『『『コーズ・ウイーグが』と言いかけたところで電話が鳴つた。素早く受話器を取るポール。

「もしもし？ あ、ジョー……』『うん、大丈夫だよ。元氣？ そうか……うん……』

電話の相手にあいづちをしつつ、ポールは田井おれに合図する。

『『めん、後でね』

おれもそれに応え、『いや、大丈夫だよ。』『ゆっくり』と、田配せをする。きっと今夜は『ユーズ・ウイーグを読まずに寝ろつてことなんだろう。

ところで、ここでポールに電話をかけてきた“ジョー”は、“ジョセフイーン”というのが正式名称であることが後に判明した。我が家にはめったに訪れることのない異性の影。それがここ数日で連續して現れたわけだが、だからといって何がどうだというわけでは

ない。もし女性に惚れられたとしても、ポールは単に迷惑するだけ。ここでヤキモキするのは、ある意味、彼に対して失礼なことでもあるだろ？『それって心配じゃないわけ？』と問うのは、おれの母親くらいのもの。気を煩わすようなことは何もない。（ところで母の勘はいつも正しいに当たるんだ。悪いことに、この時点でおれはそのことをすっかり忘れていた）

NO ART, NO LIFE これはうちの会社のスローガンだが、おれ自身、この言葉には大いに共感するところがある。“芸術”と聞くと、人によつては「堅苦しい」とか「格好つけてる」とか、そんな理由で敬遠する向きもあるが、それはおそらく芸術とは何の関連もない、何かしらのイメージによつて培われた先入観だ。スノップな芸術家くずれや、むやみやたらに難しい美術論によつて、アートがアレルゲンになつてしまつのは、とてももつたいないこと。おれが関わつている絵画芸術に関して言えば、それは特に難しくもなければ、スノップなものでもない。ただ単に、すてきで、きれいで、楽しい気持ちになる何かに過ぎない。アートセラピーの例を持ち出すまでもなく、芸術は人の心に深く影響を及ぼすもの。気持ちを安らかにしてくれたり、場合によつてはエネルギー・シユにもなり得る。絵画は投資の対象としても扱われるが、大切にされすぎて倉庫で埃をかぶつていいよりは、やはり鑑賞者に愛されてこそ価値がある。もしも、お宅の壁に空いたスペースがあるのなら、ぜひとも絵を飾つて欲しい。気に入りの一枚を見つけ出し、音楽をかけるよう気軽に。そうすれば“芸術”と言われているものが、ただ単に、すてきで、きれいで、楽しい気持ちになる何かだといふことがわかるはずだ。

今週から始まつた絵画の展示会には、人生に新たな彩りを迎えるとする人々が多く来場している。熱心に展示物を鑑賞する彼らに

聞かれる都度、おれは作品の市場価値や、バックグラウンドを説明して回る。ポールが友人を伴って訪れたのは、人もまばらになつた夕方過ぎのこと。人の空く時間帯をおれがあらかじめ教えておいたのだ。

「素敵な作品がいっぱいだ」感激したようにポールは言つた。「久しぶりに見るとやっぱりいいね。絵にふれる機会なんてめったにないから」

「よかつたら一枚どう?..きみの部屋の南側の壁、ちょうどいいースペースがある」

「セールスする相手を間違つてるよ。今日のお客はぼくじゃなくてこちら」そう言って彼が紹介してくれたのは、透けるようなブロンズの持ち主だ。ふわっと空気を含ませたカーリー・ヘアで、オーガンジーのワンピースはストロベリーピンク。まさしくキャンディーという名にふさわしい、わた飴みたいな女の子がそこにいた。

「あなたがポールの彼氏なのね。はじめまして」笑顔で右手を差し出すキャンディ。おれは手を取り、「じゃあ」など、微笑みを返す。

「今日はどういった絵をお探しですか?」

「ええと……」考えるような仕草をする彼女に、ポールは「まずはいろいろ見せてもらおう」と提案した。「全部見て、どれがいいかゆっくり決めるといいよ」

「うん、それもそうね」

彼はうまくキャンディをエスコートし、おれに向かつて『またあとで』とウインクをして見せた。

絵の前に立つて話し合つ彼らは、一見してお似合いのカップルという感じに見える。今日もポールは白いソフト帽をかぶつていて、やつぱり少しモード系のいでたちをしていた。女性と出かけるときはファッショントンの方向性を変えるんだろうか。それは彼にしては珍しいというか、ずいぶん意外なことに思える。

スタッフに閉場の指示をしていたところ、ふいに「お魚の絵は?」

と背後から声をかけられた。振り向くとそこにはキャンディーがいた。もつ会場をひとまわりしてきたんだろうか。それにしてもずいぶん早過ぎる。

「ねえ、お魚の絵はないのかしら？」

「どうやらこれはおれに向けられた質問らしいが、彼女は答える隙をとらず、さらに説明を続けた。

「あたし、お魚の絵が欲しいの。森とか花とかよりもエンゼルファ

ンシユみたいなのが飾りたいの。ねえ、そういう絵はないの？」

「そう……ですね。あいにくですが、本日の展示には」

「そうなんだ。がっかり」キャンディーは唇を尖らせた。

ポールがやつてきて「どうだった？」と彼女に聞いた。

「お魚はないんだって」

「そうか、残念だね」

おれたちのやり取りを聞いていたスタッフが、「図録からお選びいただくのはいかがでしょうか？」と口を挟んだ。「別のアーティストの作品でよろしければ魚のモチーフはいくつかござります。よろしければこちらで図録をご覧になつてみてはいかがでしょうか?」「図録じゃ、よくわからぬじやない」とキャンディー。「やっぱり直に作品を見ないと」

「そうですね」おれは笑顔で彼女に同意した。「やはり实物と図録では差がありますから。ですが作品の雰囲気はいくらかななりともわかりに……」

「魚の絵がほしかったのに」キャンディーは最初と同じ台詞を、呟き足らずの喋り方で繰り返した。

ポールはそんな彼女の肩に手を起き、「とりあえず図録を確認したら?」と優しく言つ。「素敵な魚の絵があるかもしれないし。それで気に入つたら、後日、本物を見せてもらえばいい」

キャンディーはオーバーにため息をつき、「ポールがそういうふんなり、見てみるわ」と同意した。

「図録はどこ?」

「いらっしゃりでござります」

若いスタッフはテーブルの方へ彼女を誘導し、彼女に付き添うポールは、おれを振り向いて『ごめん』と、声を出さず口を動かして見せた。結局、その日はキャンディーの欲しい『魚』は見つからず、また後日に彼女の家に別のカタログを送ることで話がついた。

「欲しいモチーフが決まっていたなら、始めからそう言ってくれればよかつたのに」

これはポールの意見。我が家のソファに腰を下ろし、ビールの缶をプシュッと開ける。「キャンディーはちょっと我が儘なところがあるんだ。きみを煩わせて何だか悪かったみたい」

「別にいいさ」おれもまたビールを開ける。「それにああいう客は珍しくない。美術館でもないとこりに絵画を見に来るなんてのは、半数が冷やかしだ」

「そりなんだ。大変だね」

「大変なのはきみの方だろ」

「ぼく?」

「キャンディーと一緒に行動を共にするのは楽なことじやないと思つけど?」

「ああ……まあね、でもそれほどでもないよ。彼女、あれで可愛いところもあるし」

「可愛い?」おれがぎょっとして聞き返すと、ポールは「うん」と笑顔を見せた。

「そうか……可愛い……か」

「どうしたの? ティーン? 彼女、可愛いと思わない?」

「いや、思わないことはないが……」

「そうだ、思わないことはない。むしろ同意できる。キャンディーは可愛い女の子だ。ティーン雑誌の表紙に出てくるような、キラキラ愛らしいキャラクター。ただ、おれが彼女を可愛いと思つるのは別段おかしくはないが、ポールも同じように“可愛いと思つ”ってことに意外性を感じるんだ。見た目はキュートで頭はカラっぽ。キャン

ディのよつな子は、ポールがもつとも苦手とするタイプなはず。あいつ手合いとずっと一緒にいることが、彼にとつて苦痛にならないなんて珍しいことだ。よほど彼女は大事な顧客なんだろうか。それともポールがついに父性に目覚めたとか？ もしおれがキャンドイみたいな子とデートしたら、『おれの彼氏』は間違いなく激怒するだろに……。

最悪なことは、ある日突然に訪れる。水面下では着々と進行しそつと背後から忍びよっていたとしても、それが発覚することについては、たいがい何の前触れもない。たとえばある朝、小さな羽虫を見つけたことをきっかけに、自宅がシロアリに占拠されていたことを知る不幸。高校の同窓会に出席したところ、かつて憧れていた女子生徒が、見る影もなく太っていたとか、自分の後頭部に何気なく手をあてたら、そこに円形脱毛症を発見するなどは、さほど重大ではないにしろ、やはり不幸のひとつに数えられる。ペットのハムスターが天に召されたり、恋人の浮気が発覚したりすることは、ダメージの大きい不幸と言えるだろう。

ここで述べたことが、未だおれの身の上に起きていないことは幸いだ（そもそもシロアリに食われるような持ち家はなく、ハムスターは飼っていない）。

気の毒にも不幸の憂き目にあつたのは、同僚のミッチ。さきほどの一例の最後にあげた出来事が、彼の人生を直撃した。ミッチは妻に浮気をされたのだ。

「何て言つたか、それは……」いつときには何て言つたらいいのか

……

「つまく言葉を探せないでいるおれに、彼は『お気の毒さま』でいいと思うよ？」と言つて、白い歯を見せて笑つた。

会社近くのデリに昼飯に出たところ、パストラミのサンドイッチ

を選んでこるミッチと偶然会つた。「先週は一日休んでたみたいだけど、どうしたの?」と聞くと、彼は「子供が風邪で」と答える。

“子供が風邪”。ははあ、よくある口実だよな、とおれは思ったが、続く言葉でそれが眞実であることを知らされた。

「女房が出てつてさ。誰も面倒を見てくれる人がいないから」

そこで『お気の毒さま』で済ませられる奴がこの地球上に果たしているだろうか。(いや、地球上つてのは大げさか。少なく見積もつて、この『テリの中には』くらいにしておこう)。

「ねえねえ、それってどういうわけで?」と、臆面もなく聞けるのはローマンくらいのもの。おれはこうこう話題にはヤンシティイヴだ。そういうわけで会話の接ぎ穂に困つてると、彼は「うちの奥さんさ、ずっと浮氣してたんだよ」と、自分のことを語り始めた。

アフリカン・アメリカンのミッチはハンサムでとても背が高い。頭も切れるし、ジョークも面白く、営業部では一番の男だとおれは思う。そんな男の妻でいることに、何の不服があるだろ? いつだつたか、彼が奥さんのために花を贈つていた話を耳にしたことがある。誰かが『ミッチは愛妻家だ』とも言つていた。いくら離婚率が高いマンハッタンでも、彼のところにだけはそんなことは起こらないと、誰もがふんでいたのだが。おれがそう言つと、彼は「おれ自身もまだびっくりしてるよ」と言つた。「女房のマリアとは八年も連れ添つて。上の子供が小学校にあがつた今になつて、まさかこんなことになるとは思わなかつたから」

「浮氣に気づいたのは最近の話?」

「露見したのは先々週。でもまあね、それ以前から、おかしいところはあつたんだけど」そう言つて、ミッチはコーヒーにポーション・ミルクを入れた。

「おかしいってどんな?」

「行動が不審つて言うか。でもそういうのは全部、後になつてからの話なんだけどな。浮氣をされているときには、少しもおかしいとは思わなかつた」

おれたちは何とはなしに同じテーブルにつき、何とはなしに会話を続けている。テーマは八年目の浮気。サンディッシュが喉に詰まりそうな内容だ。

「聞いていいかな……浮気相手ってどんな奴?」「

「彼女の友達さ」サンディッシュにかぶりついてミッチ。「おれも知ってる奴」

「うわっ、それは最悪だな」

「マリアの昔からの男友達なんだ。こつちはそれで安心…というか、油断してたんだな。『ああ、あいつと出かけるんなら大丈夫だろ』って。女房もそこを隠れ蓑にしてた。平氣でおれにこう言つんだ。

“ダーリン、今日は友達とでかけてくるわね”

「信じられない。図々しい浮気もあつたもんだな」

「まあ、最初つから浮気をしていたわけではなかつたんだけどね。始めは本当にただの友達で、いつしか恋に発展したらしい」

「それで奥さんは家出を?」

「おれと喧嘩して追ふ出てからは男の家にいる。次に余つのは裁判所だらうな」

「なんてベビーな話なんだらう。おかげでさつきからサンディッシュの味がちつともわからない。(ところで隣の席のおばさんたちは、明らかにこの話に興味津々。しつかりと耳をそば立てているようだ)

「ミッチ、あんたみたいな男が浮気されるなんて、とても信じられないよ。浮気相手に選ばれたってなら理解できるけど。相手の男はどれだけハンサムなんだ?」

「それがさ、全然そうじやない。髪は薄いし、体型はメタボだ

「じゃあ金持ち?」

「HYUNDAIの年度落ちモデルに乗つてる(HYUNDAI = 自動車メーカー。HONDAにアラズ)

「じゃあ何がよかつたんだろ?」

「知らん。おれに聞くな」ミッチは紙ナフキンで口元を拭つた。

とにかく……不幸はある口突然、降りかかってくるもんだよ。彼女の浮気を知る前日まで、おれは普通に幸せだと思ってたんだ」トレイを持つて立ち上がる彼に、おれは最後の質問をした。

「なあ、何でまた浮気が発覚したんだ?」

「コンドームさ」

「コンドーム……」

「彼女のバッグから出てきた。おれは三年前にパイプカットをしてるんだ。これ以上ない証拠品だろ?」

「確かに」おれは納得して頷いた。(ついでに隣のおばさんたちも)

。 ひとつ『ハム製品が、彼の幸福を打ち壊すきつかけとなつた。そ
う、彼は幸福だつたのだ。夫の留守中、妻が何をしているか知らず
にいれば、彼の幸せな日々はずつと続いたに違ひない。眞実はとき
に苦いもの。しかし本当のことを知らない今までいることがいいこ
とかといえば、それはまた別だ。偽りの幸福が苦い眞実よりマシだ
とは、おれには思えない。

『人生の眞実は、美味で、恐ろしく、魅力的で、奇怪、甘くて、苦
い、そしてそれがすべてである』そう記したのはアナトール・フラ
ンス。彼はまた『賢く考えていながら、愚かに行動してしまうのが、
人間の性である』とも述べている。愚かな行動を余儀なくされる人
の生は、すべての苦痛と歡喜を内包する。人生において“どちらか
一方だけ”というのはあり得ないことだ。とは言え、痛みはなるべ
く少ないことが望ましい。シロアリ被害や恋人の浮気。円形脱毛症
にハムスターとの悲しい別れ……。人生はときに何と無慈悲である
ことか! おれは五歳のときに亀のバイクを亡くして以来、ペッ
トと名のつくものは飼つたことがない。寿命が長いと聞いていた亀
ですから、おれより早死にだつたのだから、ハムスターなんてもつて
の他。ふわふわ丸まつている小動物が、ある朝冷たくなつてしたり
したら、きっとおれはしばらく立ち直れないだろう。バイクが死
んだときは、一週間も幼稚園を休んだが、今の会社ではそうはいか

ない。『ペットは家族の一員』と言いながらも、龜の忌引休暇は認められないのが現状。「ハムちゃんが死んで悲しいから仕事を休む」などと申し出た日には、悪くてクビ。良くて誰からも相手にされなくなるのがオチだ。

おれの休みは土日祝（休日出勤を除く）。サービス業であるポールの休みはランダムで、基本的には平日が多い。

「明日、ぼくは半日休みなんだけど」と、彼が言つたのは日曜日の夜のことだ。「それでね、友達と出かける約束をしたんだ。遅くなると思うから夕食はいらないよ」

おれは歯ブラシにコルゲートを絞り出したところ。それを口に入れる前に「またキャンディか？」と確認をする。

「ううん、明日はホリーと。彼女、ニュージャージーに住んで、めったにこっちに来ないから」

“ホリー”か。キャンディよりは知能のありそうな名前だ。

「そうか。で？ ホリーはどんな女なんだ？ 独身？ 美人？」

ポールはくすりと笑い、「やだな、ディーン。彼女のことが気にかかるの？」聞いてきた。

「まさか……」おれは歯を磨きながら、言葉を続ける。「ただ、相手はきみのことを知ってるのかなと思って。つまり……きみがゲイだつてことを。そうじゃなかつたら何か……ホリーに期待を持たせることになるかもしねり」

「ああ、なんだ、そんなこと？」バブルームの鏡越しにポールが微笑む。「もちろん彼女はぼくのことを知ってるよ、それに彼女は既婚者だしね。でも……」

「でも？」

「旦那さんとはあまりうまくいっていないんだ。それで今日はぼくに相談がてら、買い物に付き合って欲しいって

「そうか」

「安心した？」

「安心つて……別におれは……」口を濯いで、返事を濁す。

ポールは明るく「そうだよね」と微笑んだ。「ぼくはゲイだし、女性と出かけたところでどうにかなるわけないもの」言つて、おれの頬にキスをし、「それじゃあ、おやすみ」と部屋に戻つて行く。デンタルフロスが終わつたところで、ホリーが美人かどうか聞きそびれたことに気がついた。まあ、いいか。美人だとも別に問題はない（はずだ）。それにしても、ここ最近のポールのモテっぷりはどうしたことか。出かける相手はすべて女性だし、長電話の相手もしかり。以前はこんなことはなかつた。それはちょうど……彼があの白いソフト帽をかぶり始めたあたりから始まつたと思う。

恋人の欲目を差し引いて見ても、ポールはとても魅力的だ。おれとはまた違つたタイプのハンサムで、言つてみればボーイッシュタイプ。どこか少年っぽさが残つていて、決して声を荒げたりしないような印象がある（実際はそうでもないが）。“キューート”という形容詞が無礼にならない大人の男。例をあげれば、それは俳優のオーランド・ブルームとか、ミュージシャンのBECKとか。世の女の皆が皆、胸板の厚いセクシータイプを好むわけじゃない。デミ・ムーアだって男臭いアクションヒーローと別れて、弟みたいなアシユトン・カッチャードと一緒になつたわけで、需要といつたらたくさんある。

物腰は穏やかで、言葉遣いは柔らかい。服のセンスはよく、いい香りを身にまとう。スポーツの話題は切り出さず、恋愛についての会話を楽しむ。セックスに関連する話はしても、相手にギラついた目を向けることはなく、細かなことに気が回り、いついかなるときも大声を張り上げず、ときには感情のおもむくまま、涙を流すことを恐れない……。つまりところ、現代女性の好む男性はゲイの男。同性愛者である彼らは、幸いにも女に夢中になることはないが、もし万が一“そつち”に興味を持つようなことがあれば、普通の男ど

もには、まず勝ち目はないだろう。

「ああ、それにしておれのこの気持ちはなんなんだ？」何かイライラして落ち着きがないし、今から既に、明日のポールのことが気にかかる。それはホリーとかいう女のことも含めてだ。彼らは一緒にどこに行くんだろ？ カフェで向かい合わせに座つたりしたら（隣に座るかもしない）、いつたいどんな会話を楽しむ？ 歯を磨いたばかりだというのに、猛烈にチョコレートが食べたくなってきた。こんな深夜にチョコレートだつて？ ローマンが聞いたら目をむくだろうな。

「おれは大人しくベッドに入つた。チョコもポールも頭から追い出す。今日はもう寝ちまおう。『もし嫌なことがあつたとしても、眠つてしまえば新しい日よ』。子供の頃、ママがよくそう言つてたつけ。疲れ、疲れ、安心して眠れ。眠つてしまえば新しい日……明日はポールとホリーのデートの日だ。ああ、嫌な気分だ。まったく、おれはどうじつじつまたんだろ？ 本当にもういって寝ちまえ。

「ただいま」という挨拶に応酬するのではなく、「おかえり」という言葉だが、おれが言ったのは「そのジャケットは？」という疑問文だった。デートから帰宅したポールが身につけている白いジャケット。それはおれが初めて目にするものだつたからだ。

「あ、これ？ 買つたんだ」と、ポール。「せっかくの服なのに、途中で雨が降り出してまいつたよ。雨はそんなに長い時間じゃなかつたけど……ああ、靴が汚れちゃつたな」そつと、レザースーツのスリーブを残念そうに見下ろす。

「買つたつて？ その上着を今日？」

「そう、ホリーが見立ててくれてね。彼女、すごくセンスがいい」彼の頭には、またしてもあのソフト帽。それは今着ているジャケットと、とてもうまくマッチングしている。まるでファッショングル

誌の『街で見かけたエレガント』の特集に出てきそうな雰囲気。ちなみに俺は着古したスウェットスーツの上下を着用中。気心の知れた恋人にしか見せられない格好だ。

「どう? 似合うかな?」ポールはジャケットの襟をササッと撫でて言つた。

「ああ、すごく……よく似合つよ」

確かに、そのジャケットはとてもよく彼に似合つていた。（確かに、ホリーとやらはセンスがいい）。似合つてはいたが、これは“ポール”という感じではない。襟の周りにはぐるつとワインレッドのパイピング。左のポケットには同色でジグザグに刺繡が入れてある。ママが見たら「ミシンがけを失敗したの?」とでも言いそうなデザイン。こういう“モード系”は彼らしくない。それにこの靴。いつもはキャンバス地のテッキシューズを愛用しているのに、今日に限つてレザーのスポーツシューズ（しかも白だ）を履いている。ポールは靴の汚れに神経質なほうじゃない。運動靴なんだから汚れてもいいってばかりに、気にせず公園を歩き回るような男なのに。なんて言うかこれは……この格好はまるで……“おれみたい”じゃないか!

衝撃の事実に呆然としていると、ポールは「来週またホリーと会う約束をしたよ」と、予定をさらり、口にした。「彼女の家に招かれたんだ」

「ちよつ……ちよつと待てよ。なんだって? 彼女の家に? 旦那とうまくいってない女の家に遊びにいくつてのか?」

「やだなあ、変な言い方して」軽く肩をすくめるポール。「別にふたりきりじゃないよ。小さな子供がいる。彼女、娘の髪を切りに行く暇もないって言つから、ぼくがやつてあげようかつて話になつただけ」

「それにしたつて……」

なぜかここで、おれの脳裏にミッチの顔が浮かんだ。それは『不幸はある日突然、降りかかるつくるもんだよ』と教訓を告げた男の

顔だ。

おれが黙り、「ぐる」と、ポールは「どうしたの?」笑顔で聞いてきた。

本当、どうしたんだろ。おれは何でうまくしゃべれないんだろ。これは昨晩と同じ気持ち。イライラし、落ち着きが奪われ、ホリーフて女がやたら気にかかる。

「ポール……おれは何て言つた……きみとホリーと一緒にいる」とが……」

「心配?」

「ああ、そうだ」

「どうしてそんなこと気にするの? ほくはゲイだよ? おかしなことになんて、なりよつもない。きみとは違つてね」

彼は笑顔でそう言つた。しかしその時は 少しも笑つていなかつた。

“きみとは違つて”。その台詞でようやくおれは理解した。これは復讐だ。彼はおれに一矢報いようと、こんなことをしているんだ。そしてそれがわかると同時に、おれは自分の感情の正体をも理解した。これは嫉妬だ。おれはホリーに嫉妬してゐる。なんてことだ。何から何まで、なんてことだ。

「どうしたの?」と、ふたたび問つポール。やつぱりだ、やつぱり目は笑つてない。

「いや……なんでも……ない」おれは調子の悪いロボットのようにな切れ切れに返答。ポールは「じゃあ、シャワーを浴びてくるね」と言つて、バスルームへと消えた。

ポールはああ見えて、一度怒ると止まらなくなるところがある。それはわかっていたはずじやないか。一方、おれは感情を溜め込む方。今も何も言えなかつた。“なんでもない”なんて嘘だ。おれは嫉妬してる。そうか、これが嫉妬か。世間でよく言われている通り、なんて不快なものなんだ。それにしても……これはいつたいどうしたらしいんだろう? ポールは浮氣をしているわけではない。そこ

に妙な言いがかりをつけるわけにもいかないし、ましてや『ホリーと会うな』というわけにもいかない。おれが広告代理店の『デザイナー』とディナーに行つた件について、ポールはおれを罵倒し倒したが、こつちはあいにく彼のよつに感情的になることはできない。基本的にそういう性格じゃないんだ。

ミッチは妻を訴えることができた。アーニにはつきりとした被害があるからだ。おれの身の上に起きたことは、ミッチと比べれば何てことはない。不幸と言つには生ぬるぐ、幸福と言つには今一步届かず。嫉妬する気持ちは最悪だ。こんなに苦しいものなら、民事裁判に“精神的苦痛”として提出してみよつか？しかし無論のこと、それは認められることはない。弁護人から「チベットの寺にでも行つたらどうですか？」というアドバイスを受けたりして。うん、それもいいな。醜い感情から解脱して、高次の意識へとひとつ飛び。座禅と薬草の相乗効果で、嫉妬心からおサラバだ。（ああ、もちろん冗談だ！皮肉だよ！誰が寺になんか行くもんか！）

結局、翌日になつてもモヤモヤした気持ちは晴れることなく、おれは通常通り仕事に行つた。ミッチはまた休んでいる。きっと家のこと다가大変なんだろう。

午前中からやけに疲れを感じ、昼食にはまだ早いが、エスプレッソを買いに出ることにする。職場近くのコーヒーショップは、おれが毎日のように利用している場所だ。

シャボン玉を飛ばすピエロの大芸の横を通りすぎたところで、おれはいつもとは違うものを目にしたことに気づく。ピエロのことじゃない。ポールだ。今日は午後から出勤のはずの彼が、こぢんまりとしたデリカフェでくつろいでいる。「やあ、ポール。こんなところでどうしたんだ？」と、おれが声をかけなかつたのは、彼が女といったからだ。通りに面したオープンテラスで仲良くなつた。お相

手は先日のキャンディだ。いくら女に興味がないからってこれはないだろ？　このカフェはポールの職場とは近くなく、おれの会社の目と鼻の先。彼が意図的にここを選んだことは想像に難くない。人の目につきやすい場所。おれの目につきやすい場所を。

嫉妬を通り越し、腹立ちすら覚え、彼らのテーブルにつかつかと歩み寄る。談笑するポールは、おれの存在に気づいていない。

「この……浮氣者め！」

そう怒鳴ったのは、驚いたことにおれじゃなかつた。声の主は見知らぬ男。がつちりした体格と、ほぼスキンヘッドのショートカット。彼はポールとキャンディのテーブルに進み、「人のことをためつすがめつ眺め、さきほどの怒鳴り声などなかつたことのよつて、『キャンディス』と、柔らかく言葉を発した。

「おまえ、こんなところで何してる？」

あ、それはおれの台詞だ。おれがポールに言おうと思つたやつだ。「昼間から、こんな人目につくところでデートとは。恐れ入つたぜ」これもおれの台詞。同じことをおれは思つてた。

「このクソアマ」

これは違うな、さすがに。たとえ怒り狂つていたとしても、おれはあからさまな罵倒の言葉は口にしないんだ。それにしてもキャンディ（キャンディスか）に、ネアンデルタール人の彼氏がいたとは驚きだ。男は太い腕をこれみよがしに組み、「てめえ、ここ数日どうもおかしいと思つたら」と、彼女に目を細めた。

「まさか浮氣してやがつたとはな」

その言葉にキャンディはきつと目を吊り上げ、「なに言つてんの、浮氣なんかしてないわよ」と、言い返す。

「そうかい？　じゃこいつは誰だ？　おまえのお父さんか？」

「ポールは美容師よ。わたしの髪をいつもやってくれてるのよ」

「ほう、そうか。じゃあここは美容室か？　見たところシャンプー台はどこにもないようだが……？」言つて、男はぐるりと周囲を見回した。

「ちょっと、落ち着いてよ。わたしと彼とはここで一緒にお茶して
るだけじゃない」

「だから何だ？ ここではお茶してるだけでも、夜になるとそれだけじゃ済まないんだろ？……この尻軽女が！」 吐き捨てるように男が怒鳴ると、キャンドゥイは身体をびくつとさせて黙り込んだ。

「おい、てめえ」 男はテーブルに片手をついた。ポールにぐつと顔を近づけ、「おれの女が世話になつたな？」 と、古い西部劇のような台詞をつぶやく。

「ぼくは別に何もしてない」とポール。「きみがどう誤解しているのか知らないけど……」

「誤解だと？ おれが誤解してるって？ セーかよ！ おまえらはおれのことを見下す馬鹿だつて思つてるんだな？ 間抜けな彼氏を出し抜いてやつたつてそう思つてるんだろう？！ ロケにするのもいい加減にしろよ！」 男が大声を張り上げると、店内に緊張が走った。若いウエイターは男を見つめ、固まつたまま動こうとはしない。

これが赤の他人、まるつきり知らない奴らの痴話喧嘩であつたら、おれは後も見ずに通り過ぎたことだらう。だが今はそつはいかない。ポールはおれの恋人だ。彼の窮地を見過ごして去るなど、絶対にできるわけがない。しかしここは……いつたいどうやって切り出したらいいんだらう？

「あの……ちょっと……」 おれは軽く男の肩を叩いた。筋肉の盛り上がりがつた、素晴らしい肩だ。

「ああ？ なんだテメーは？」 男はおれを睨みつける。

「おれは……」 と言いかけ、一瞬ポールの方を見る。彼は目を丸くして、『なんでこんなところにいるの？』 という顔をしていた。

「おれは……そこにいる彼のボーイフレンドなんだ。つまり、ええと、あんたが文句をつけているその男はおれの彼氏で、おれたちはゲイなんだ。だから、あんたの女が浮氣してることはある得ない

い

「はあ？ 何言つてやがる？」 唇を曲げて聞き返す男。どうやらこ

いつはおれの言葉を理解できなかつたらしい。しかし無理もない。女の浮氣現場を突き止めたと思ったたら、いきなり関係ない奴が現れ、ゲイだと名乗つたあげく、浮氣相手の彼氏だと告白。そんなことを突然言われて『なーんだ、そうだつたのか』と膝を叩く人間など、そつ多くはないだらう。

「引っ込んでる」男はそつけなく言い、おれの肩を突き飛ばすようにして押した。「おれはこいつらに話がある。とくにこの男前とな男前ならここにもいるぜ。こっちに鞍替えするつてのはどうだ? ……とかいうノリは、この男には通用しないだらう。彼から受ける印象は“単細胞”。よく言えば“素直でピュア”って感じか。その“良い印象”を信頼し、おれはしつこく男に訴えかけることに決めた。

「あのや、あんたの彼女は浮氣してないよ。少なくともその男とは、そう言つと、雄牛はこちらを振り返り、“しつこい野郎だ”と言いたげに、上から下までおれを睨んだ。

「あんたが疑つてるのは、おれの彼氏なんだ。そこまではいいか? わかつてくれるか? そいつはゲイなんだ。つまりおれも。だからおれの彼氏はその子と浮氣なんかしてない。だからあんたも… : あんたの彼女信じてやれ」

「このあばずれを信頼しろつてか? はつ! できるもんか!」「公衆の面前で“あばずれ”呼ばわりされたキャンディは、ぎゅつと唇を噛み締めた。何か言いたそうだが、発言する気配はない。「なあ、あんたが信じようと信じまいと、眞実はひとつなんだ。ホールは彼女の浮氣相手じゃない。何度も言つように彼はおれの……」「つむせえ! 横から出てきてグダグダ抜かすんじゃねえ!」

“あつ、ヤバイ”と思つたときにはもう手遅れ。男の拳がおれの顔面にモロに当たつた。ガシャンと何かが割れる音と、店内の女性客のきやーつという悲鳴を耳にする。おれが倒れたのは悪いことにテーブルの上だった。床に背はつかなかつたものの、食器類すべてをなぎ倒したことは、事態のより悲劇的な演出となる。顔をおさえ

てながら立ち上ると、手のひらにべつとり血が付いた。そういうえばパンチが入った瞬間、軟骨の折れるような“べきつ”という音を聞いたように思う。おれは鼻から盛大に血を流しつつ（それにしてもどうして鼻血ってこんなにいっぱい出るんだろうな？）、暴力犯罪を犯した相手と対峙した。彼は“思いのほか大ごとになってしまった”という表情で辺りを見回したが、すぐに威勢のよさを取り戻し「何だよ、やろうつてのか？」と凄んでみせる。

原始の息吹を感じさせるこの男に勝てる自信はこれっぽっちもないが、せめて一発ぐらいは殴り返したい。目には目を、歯には歯を。クリスチヤンであっても、ときにはハムラビ法典を引用したい気分のときもあるんだぜ。

おれが野蛮な気持ちになつてきたあたりで、カフェの従業員がタオルを差し出した。

「お客様…だ、大丈夫ですか？」

無言でそれを受け取り、顔にあてる。赤く染まつた白いタオルを見つめていると、従業員に遅れをとり、ポールがおれに声をかけた。「ディーン……ああ、なんてことに……」

「大丈夫だ。鼻の血管が切れただけだ。心配しなくていい」

すると男は「そうか、大丈夫か。それはよかつた」と尊大に言い、「じゃあ行くぞ」とキャンディの腕を掴んでひっぱった。

大丈夫なもんか、男前の顔に色をつけやがつて。もし鼻の骨にビビでも入つてたらどうしてくれるんだ？ おまえを“美形破損罪”で訴えて、慰謝料をたんまり取つてやるからな！ ……というのは、ほとんど涙目になっているポールを目の前にして言つことじやない。何かカツコいい決め台詞を、奴に叩き付けてやりたかったが、鼻が痛くて考えがまとまらない。暴力男は女の腕をぐいぐいと引っ張り、そそくさと店から出て行つた。（きっと警察を呼ばれる）ことを懸念したのだろう

「救急車を呼びますか？」とカフェの従業員。

「いや、そんな大げさな。ただの鼻血だ。騒がせて済まなかつた

見ると足下には割れたグラスと「コーヒー カップが散乱している。

「グラスを割つてしまつたな……弁償を？」 そうおれが申し出ると、従業員は目をしばしばさせ、「いえ、あの……お客様はむしろ被害者じゃないかと……」と、小声でわざやいた。

「あ、そうか……」 言われてみればそうだ。おれの胸のあたりは今や血まみれだ。シルク素材はシミになりやすい。これはクリーニングで落ちるだろうか。

ポールが心配そうに、おれの頬を撫でた。「一応、病院に行つたほうがいいよ」

「ああ、でも救急車は嫌だな。すまない、タクシーを呼んでもらえるか？」

「わかりました」 親切なスタッフは厳しい顔で頷いた。

レントゲンを撮つた結果、骨には何も異常はない。鼻血もすぐに止まつたが、心配なのはシャツの汚れだ。付着した血液は、すっかり乾いてゴワゴワになつている。若い女の看護師が「喧嘩でもなさつた？」と聞いてきたので、「悪漢に襲われている恋人を助けようとして傷を負つた」と正直に答えた。彼女は羨望のまなざしをあれに向け、「勇気があるのね」と褒めてくれた。まったく、これぐらいの賞賛がなきや、とても暴力沙汰なんてやつてられない。ハンサムを殴つた代償は高いんだぞ。それとこのシャツ。あの男が身につけていた全身の衣類の総額よりも、遙かに値が張るに決まつてゐる。

不幸はある日突然に。ミッチの言つたことは正しかつた。今朝の時点では『昼過ぎには殴られて鼻血を吹いているだろうな』なんて、少しも予想だにしなかつたんだから。

病院のロビーで会計を待つていると、となりに座つていたポールが、「キヤンディに彼氏がいるなんて知らなかつたよ」とつぶやいた。「こんなことになるなんて思つてもみなかつた……」

セリヤセツだ。こんな展開、誰だって思つてもみなご。テレビに出てくる超能力者だつて、この筋書きは言つて当てることはできないだろ？

「あの店にするんじやなかつた」と、ポール。

「あの店？」

「さつきのかフュ。あそこはキャンディの家のすぐそばなんだ。ボーライフレンドが見つけるにはあまりにも容易い場所だよ。でもキャンディはあそこがいいつて言うから。ぼくはちょっと気になつたんだよ。あんまりにもきみの会社にも近いし。もちろんやましいことがあるわけじやないよ。でもきみが一生懸命仕事してるそばでや。なんか嫌な気持ちだつて思つたんだ」

ポールはわざとあの店を選んだのではなかつた。おれに見せつけてやううなどとは、これっぽっちも考へていなかつたのだ。

「つむき、弱々しく言つポール。」セツとバチが当たつたんだ。きみに意地悪をしたから」

バチは当たつた。おれの顔面にクリーンヒットだ。

「本当だつたら、ぼくが殴られるはずだつた。なのにこんな……」

しょんぼりする彼に、おれは今こそ言つべきカッコいい決め台詞を放つた。

「きみじやなくてよかつたよ……」そして彼の側頭部にキスをする。ポールはぽろりと涙をこぼし、「うめん」と小さく言つた。

「きみのせこじやない」

「いいや、ぼくのせこだ。ぼくがきみに意地悪したからだ」

「意地悪？」

「Uの一週間、ぼくはきみに意図した意地悪をずっとしてた。きみは氣づいてなかつたの？」

「ああ、そのことか。いいや、氣がついてたよ。てゆうが、昨日だけだ。氣づいたのは。

「女の子とデートして“他意はない”だなんて、それがどんなにひどこにとかわかつてほしかつたんだ。きみには口で言つてきかせて

もわからないし、だからぼくも手段を講じるほかなかつた。でもまさかこんなことになるなんて……」

“でもまさか”とポールは言つた。“でもまさか”。おれだつてそう思つ。おれにとつてはちょっとした女性とのデート。夕食と一緒にすることくらい何も大したことじやないと思つていた。でもまさか、それがポールにとつてこんなにも大ごとだつたとは。いや……彼はそう言つてたじやないか。あんなにも怒り狂つてた。おれはそれでもわかつてなかつた。自分にはやましいところは何もない。それゆえポールの怒りが理解できなかつた。しかしこれは“やましい”“やましくない”の問題じやない。彼は怒つて、傷ついていた。そのことを無視した結果がこれだ。彼を意地悪な魔魔に変えたのはおれだつたんだ。

ポールは深く息をはいた。両手で顔を覆つて、しばらくし、手を膝に下ろす。そしてそれからまた話し出した。

「きみはあのとき、キャンディの彼氏に“彼女を信じてやれ”って言つただろ？ ぼくはそれを聞いて胸が苦しくなつた。だつてぼくはきみのことを信じられなかつたから。きみが浮氣をしてるつて思つて、それでこんな復讐をしたんだ。あの日、きみから何度も“浮氣してない”って言われて、少しも信じられなくつて……」と、頭を垂れて左右にふる。「それつてキャンディの彼氏と同じだ。少しも自分の恋人のことを信じてない。聞く耳も持たずに、有無を言わせず決めつけて……。“おれの彼氏はその子と浮氣なんかしてない”、きみはそう言つたよね。それでぼくはこう思つた。“ディーンは少しもヤキモチを妬いていない、彼はぼくのことを信じてるんだ”つて……」

ヤキモチは妬いた。初めてのことだ。あんなに苦しいことは一度と御免だ。

「きみみたいにピュアで単純な人間に、ぼくの意地悪が通用するわけなかつたんだ。結果的には大失敗。ヤキモチを妬かせるどころか、きみに傷まで負わせてしまつたし」

“ピュアで単純な人間”。それは何だらう。あまり素敵な印象じやなくないか？変換すると“単細胞のマヌケ”とも言えなくもない。“受ける印象は単細胞。よく言えば素直でピュアって感じ”、それはおれがキャンディの彼氏に思つたことだ。なんだ、おれたち案外、共通点があつたんぢやないか。

「ごめんなさい」ポールは詫びを口にした。

彼はこう見えて、一度怒ると止まらなくなるところがある。怒りに火がつくのはあつという間。そのかわり許すのも一瞬だ。そしておれは感情を溜め込むタイプ。ポールのように怒鳴り散らしたり、懺悔したりして吐き出すことはほとんどないため、彼のやり方にはずいぶん面食らうところもある。そしてポールもまた“溜め込むティーン”つてものに、手を焼いているんだろう。

不意に彼が、おれの頭に帽子をのせた。例の白いソフト帽だ。

「この帽子、やつぱりきみの方が似合つた」言つて微かに目を細める。「本当はきみにあげようと思つて買つてあつたんだよ。でも結局……」ポールはふうっとため息をついた。「ケチがついた。もつと早くにプレゼントしておけばよかつた。タイミングを見計らつているうち、こんなことに」

確かに。今これを貰つても、おれは素直には喜べないだろう。帽子を見るたび、今日の鼻血の味を思い出してしまうそうだ。

おれは帽子を脱いで膝に置き、「何にせよこれは凄いアイテムだぜ」と明るく言つた。「こいつをかぶつた途端、きみの回りに女が群がってきた。いつたいどんな魔力なんだらうな？ 博物館に寄贈した方がいいかも」

「ぼくはきみの真似をしただけだよ」ポールは笑つて肩をすくめた。笑顔だ。なんだかずいぶん久しぶりに見た気がする。

「ぼくはこの帽子をかぶつて、ちょっときみの真似をしただけなのに。あんなにモテるなんて自分でもビックリ。なんだか有名人になつたみたいな気分だつた。ぼくがストレートだつたら幸福だと思つたろうな」

「きみがストレートでなくてよかつたよ」

「きみの強敵になつたろうから?」

「そうじやない。もしストレートだつたら、きみはおれの……恋人ではありえなかつたわけだから」おれはそつとポールの手を取つた。「だつてそつだろ? おれは元々ストレートで、その上もしく、きみまでストレートだつたら……」

「ああ、ディーン……」

「今のおれの幸福はあり得ないんだ」

ポールは一瞬、目を見開き、そしてふあつと柔らかく細めて見せた。それから心底、幸福そうな笑みを浮かべ、「ぼくは今ほど自分がゲイでよかつたと思つたことはないよ」と言い、おれの身体を思い切り抱きしめた。おれたちは数日ぶりに互いの愛情を感じ、ここが病院の待合室であることも忘れてキスをした。もちろんそんなに激しくじやない。それは帰つてからのお楽しみだ。

その夜は数日ぶりに彼とベッドを共にした。鼻をかばいつつするセックスはいくらか困難を極めたが、ポールは有能な看護士のようにおれを扱い、“まだこんな方法があつたのか!”と思えるような、いろいろな技を披露してみせた。

「ああ、ポール……また鼻血が出そうだ」

「本当? 痛む?」

「いや、そうじやない……別の意味でさ」

彼は艶やかな笑みを浮かべ、「もつといつぱい興奮して……」と、

おれのモノを口に咥え込んだ。

情熱的な愛の一晩 その後に、おれたちはこんな会話を

繰り広げる。

“見た”んじやない! “見えた”んだ! おれはポールに向かつて両手を広げ、言葉の違いを強調した。「偶然目に入つただけだ。

そもそもあんなに短いスカートをはいて、生足を出して歩きてりや、そりや誰だって見るだろ！？」

“誰だつて”？！それはいつたい誰を指してそういうわけ？！

ポールは腰に両手を置いた。それはおつかない女教師のよつなポーズだ。「少なくともぼくは女性に見とれてほけっとするよつないことないよ」

「そりやわうだろ！ きみはゲイなんだから！」

「きみだつてゲイだ！」

「ああ、そうやー。だから女の足に田を畠めたぐらこでギャンギャン言つたな！」

「子供っぽい屁理屈！ 聞きたくもない！」

「子供っぽいのはそつちだるー。」

「どうせぼくは子供っぽいよー。でもわざわざ理性的にしゃべってたつもりだけじね！ 子供っぽいってのはじつこいつじゃー。」

馬鹿！ スケベ！ ハゲ！』

「な……！ 誰がハゲだつて？！」

「きみの未来を罵倒したんだ」「

「ひのつ……！ 可愛くない！」

「可愛くなくて申し訳ない。きみにひとつての可愛いって、パリス・

ヒルトンみたいなヤツだろ？ まつたぐヅッとするよー。」

「おれの好みを決めつけるなー。くそー。もつ出でへー。」

「出でけ！」

「きみがもつとも聞きたくないと黙かず口にすることなく聞いてくれん

だ！ 有り難く思えよ！」

「なんてマツチヨなんだ！ ああじつ早く出て行つてくれー。きみがいなきや今みたいな台詞も聞かずに済むー。」

「後で泣くなー。」

「泣くもんかー。」

その数時間後、おれたちはベッドでこんな会話を繰り広げる。

「ハゲとか言つて」「めんね

「いいさ、気にしてない。おれこそあんなひどいことを……本当に悪かったよ」

「ね、ディーン、もつとこっちに来て……」

「ポール……」

「ディーン……」

夫婦喧嘩は犬も食わない。自分たちがあきれたカッフルだつてのは、ようくわかつてゐる。

嫉妬や誤解、意地の張り合い。恋人同士の間では、“なにもかも納得がいく”ということの方が珍しい。小さな喧嘩、そして和解。それは誰にでもある小さなやり取りだ。もし万が一、いがみあいが続き過ぎて、本当にどうしようもないところまで来てしまつたら。最終的におれたちに残されているのは、納得することでも、理解することでもなく、ただお互いを許すということ。腹が立つとも、認められなくとも、ただ手放して先に進む。壊してしまつのはとても簡単。愛し続けることは難しい。考えすぎの頭を停止し、素直になつて……。

今後、女性とふたりきりで会つときは、あらかじめ誤解のないよう、ポールに報告する。それはアップルパイを焼くより、ずっと手間のかからないことだ。問題は“デート”ではなく、相手の気持ちを無視すること。思いやりの配慮がありさえすれば、無駄な混乱は避けられる。最悪なのは“喧嘩すること”ではなく、“許さないこと”。愚かに行動してしまうのが、人間の性であるとすれば、間違いはどうしたつて避けられない。認め、許し、おれたちは一緒に先へと進む。共に歩む者がいれば、きっと幾多の苦難も乗り越えることができるだろう。愛することは人を強くする。おれはひとりでいた頃よりも強くなつた。それはポールを得たことで。きっと今ならハムスターも飼えるだろう。ふわふわ丸い小動物が、ある朝冷たくなつていたとしても……。いや、やっぱりそれはまだ無理だ。考えただけで涙が出てきた。

E
N
D

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード17・愛はいつでも突然に（http://nocode.systu.com/n3054h/）」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545g/>

ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード16:不信と嫉妬 (Hung Up)

2011年8月15日03時24分発行